

## 特集3 「国際学部」のSDGsの取り組み

### 「アフガニスタンと平和」シンポジウム①

#### 紛争下におけるキャリア形成 —平井礼子氏と宇大生による座談会—

藤井 広重

座談会参加者：宇都宮大学国際学部国際学科3年 菊地翔、鈴木ひとみ

#### ●概要

2021年12月3日に宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター 国際平和と人権・人道法研究会は、国際学部清水奈名子研究室との共催にて、「アフガニスタンと平和」シンポジウムをアフガニスタンで長らく勤務された平井礼子氏をお招きし開催した。シンポジウム終了後に約1時間、「紛争下におけるキャリア形成」をテーマに平井礼子氏と宇都宮大学国際学部の学生2名との座談会を開催し、大学院進学を視野に入れた国際協力分野でのキャリア形成や、緊急人道支援に関する取り組みまで多岐にわたる学生からの質問に平井氏は大変丁寧にご解答くださった。

このような国際協力の専門家に学生が直接お話を伺う座談会は2019年（野口元郎氏）、2020年（境悠一郎氏、田邊宙大氏）に続き3回目となる<sup>1</sup>。座談会に参加した学生はそれぞれに国際貢献への意思を育み、その後、国際協力機関でのインターンに採用されるなどキャリア形成にもつながっている。本活動の全体像やインターンに参加した学生による座談会については、多文化公共圏センター年報第14号に掲載されている「国際平和と人権・人道法研究会」2021年度活動報告をご参照頂きたい。なお、本SDGs 特集では、「アフガニスタンと平和」シンポジウムにて司会を務めた清水研究室に所属する学生2名が執筆した基調講演についての報告書と、シンポジウム後に開催した座談会（本稿）についてまとめ、掲載している。まず座談会の内容は、以下のとおりである。

#### 藤井

では座談会を始めたいと思います。昨年は平井さんもお存知の田邊さんと境さんの2人にお越しいただき、「SDGsを達成するために国際機関ができること」についてお話をいただきました。今年の座談会では、SDG16との関連で「紛争下におけるキャリア形成」をテーマに2名の学生と進めていきます。まず、学生のお二人から自己紹介ください。

#### 鈴木

先ほどはご講演ありがとうございました。藤井ゼミで勉強させていただいております、宇都宮大学国際学部3年鈴木ひとみと申します。マスメディア関連の就職を希望しています。よろしくお願いします。

#### 菊地

本日はご講演ありがとうございました。同じく、国際学部国際学科3年、藤井ゼミに所属しております菊地翔です。藤井ゼミでは平和構築や難民支援について勉強しておりますので、本日のご講演も興味深く聞かせて頂きました。座談会もよろしくお願い致します。

#### 藤井

では、テーマに沿って、学生のお二人から平井さんに伺ってみたいことはありますか。

#### 菊地

はい。僕はキャリアについてお伺いしたく、

ご講演の中でアフガニスタンは20年間という時間をかけて多くの人が支援に携わってきた現場だとお話をいただきましたが、米軍が撤退するというのをきっかけに戦闘が再発してしまったということからも、すごく難しい現場なのかと改めて感じました。最終的には、紛争が再発してしまったり、女性の権利についてもまだまだ守られなければいけない現場で働かれてきた平井様のご経験で、どういったことがやりがいや、モチベーションになってご活躍をされてきたのか、お話を伺いたいです。よろしくお願い致します。

#### 平井氏

そうですね、こういう支援の現場で、モチベーションを継続するというのは結構大変です。非常にストレスフルな環境で仕事をしているのはもちろんですが、支援をする活動の現場には、ニーズはすごくある。何から何まで。学校や水がない、農業のための種や肥料がない、クリニックが近くにない、薬を買うお金がない。非常に貧しい国ですから、ないない尽くしです。100人いても支援ができるのは、その中のごく一部の人たちです。だから、仕事の中で全員支援できない、ということを書いて回らなければいけない。それは長くこの分野で働いている人たちにとって一つのチャレンジだと思います。

その中で、それでもこの仕事を続けたいと思うのは、必要な人たちのところに支援が行き渡っている現場を見た時です。続けてきて良かったなと思って、明日もまた頑張ろうとなるんです。あとは、例えば昔アフガニスタンにいたときに、砲弾が落ちて羊が殺されて、何か保障はしてもらえないか、と街から遠く離れた村の男性が事務所に来たんです。その人から一通り話を聞いた後、帰りがけに言われたのが、その時点でアフガニスタンでは2回大統領選が行

われていたのですが、「僕は2回とも女性の候補者に投票した。なぜかっていうと、これまでのアフガニスタンの紛争は男の人がやってきた紛争だから」と。保守的な地域の人で、読み書きができない人だったのですが、そんな人が女性大統領に投票したと言っていた。このような人たちの話を聞くと、選挙に向けてのキャンペーンとか、女性の人権に関する啓蒙活動など、色々な団体が実施してきたことの成果なのかな、ということを感じました。このように、これまでの取り組みが完全に無駄じゃない、ということを見ることができた時にモチベーションが上がりますね。でも、難しいです。長年、厳しい環境の中で仕事をすればするほど、自分が疲弊してしまうこともあるので、バランスは難しいです。

#### 菊地

ありがとうございます。僕自身、平和構築や、難民支援に漠然と興味はありましたが、まだ明確な目標がなかった時に、最近のアフガニスタンの事例があったので、難しい世界であると感じました。

関連してもう1点質問させて頂きたいのですが、支援の現場に近いというのは、僕のイメージの中だとNGOなどの草の根的な支援を行える団体で、UNAMA（国連アフガニスタン支援ミッション）や国連機関は現場から離れるイメージがあります。アフガニスタンの現場でも、UNAMAは、現地の人からは遠い存在だったのでしょうか。

#### 平井氏

UNAMAは政治ミッションだったので、直接支援をする立場ではなく、調整役でした。現地の人との接触で言えば、基本的に政府の関係者でした。州政府の関係者や、州の下に郡がありますが、その郡関係者とのやり取りが主でし

た。村に行って何か支援をする、という仕事ではなかったですね。

NGOはそういった意味で、より草の根の活動をしています。村で学校を作ったり、井戸を掘ったりということをしているわけです。でも、国際スタッフというのは相対的にみるとお金がかかります。なので、国際スタッフは、基本的に裏方業務が多く、会計、調達、報告書を書く。国際スタッフが行って、井戸を掘ったりするのはあんまり効率的ではない。なので、日々現場に行っているのは現地のスタッフの方々です。だから国連ミッションと比べれば、国際NGOで働いている国際スタッフは、村に行って村の人の話を聞いたりという機会などは勿論ありますが、どちらかというと裏方業務が多いのです。やはり長期にわたって、できるだけ人々のニーズに合わせて支援を実施していくという意味ではNGOが一番草の根の活動に近いと思います。でも、NGOもかなり大きい組織は、国連とあまり変わらない規模で仕事をしています。



藤井

平井さんはどちらの活動が好きですか。

平井氏

様々な要素がありますね。難しい。もともとNGOで活動していたので、国連の政治ミッションで働くということは考えていませんでした。

た。応募した国連ミッションのポストというのは、復興開発支援の援助調整を行う州事務所長のポストでした。それだったら支援の延長なので良いと思って応募し、蓋を開けてみたら政務官のポストで、結果、思っていたのとちょっと違う仕事をするようになりました。援助調整という役割もありましたが、それ以外の仕事もたくさんやって、それはそれで非常に興味深かったのですが、また支援事業に直接携わりたいとその後思いました。

藤井

政務官としても、またNGOの現地代表としても、ローカルスタッフを取りまとめる仕事は大変だと思いますが、何か苦勞されたこと、すごく良かったことなどはありますか。

平井氏

ピースウィンズ・ジャパンで働いていたときは地方のサリプル州というところにいましたが、スタッフと共同生活でした。一つのコンパウンドに、事務所兼宿舎があって、現地スタッフも国際スタッフも同じコンパウンドで寝泊まりして。国連なんかは立派なコンパウンドがあって、外国人スタッフは結構立派なところに住んだりするのですが、NGOはそこまで資金力がないので、みんなで共同生活をしていました。今振り返ってみると、スタッフと信頼関係を構築したり、仕事をしたりする上で良かったのかな、と思います。

女性だからということで難しいことはなかったのですが、一回だけスタッフを怒鳴ったことがあって、それがきっかけでそのスタッフが辞めてしまった。国際スタッフで事務所長といえども、他の人の前で女性に怒鳴られるのは、やっぱりプライドが許さなかったみたいで、それは後から「しまったな」と大変反省しました。

## 菊地

タリバンの特徴として、女性の権利の軽視が一つ挙げられると思いますが、どうやって実際の現場で女性の権利侵害を改善されているのでしょうか？人道支援団体が活動を行うにあたって、公平や中立を原則として掲げることは大切だと思いますが、実際の現場で女性の権利の尊重とかを主張するのは、公平や中立な活動との兼ね合いで良いのか、お伺いさせていただきたいです。

## 平井氏

女性の権利については、まだタリバン政権が樹立されたばかりなので、判断しかねますけれども、人道支援団体の多くは女性の権利啓蒙といった活動を中心にはしていないんですね。ただ、支援が必要な人に対して支援を実施するというのが人道支援の原則ですから、支援を必要としているのが女性であれば、女性に支援が届くような努力をします。タリバン政権下でも、今後女性に対する支援を継続していくにあたって、女性スタッフの雇用を継続することが非常に重要です。社会的に女性が家族以外の男性と接触することが許されないところですので、例えば、女性に対する医療行為を行う時には、女性スタッフが必要になります。だから、実際にタリバン政権再樹立後も、例えば、学校の女性の先生が教師としての職を続けられるようにとか、保健センターで活動している保健師の女性が活動を続けられるように、トップレベルや地元レベルで、タリバンのリーダーシップと交渉が続けられているかと思います。地域によってアプローチの仕方は変わっていくかと思いますが、やりようがあります。



## 藤井

では、鈴木さんからはいかがですか？

## 鈴木

ありがとうございます。私は今、就活をしながら国連のインターンにも応募し、大学院進学も視野にいられています。記者志望なので進学する際は、ジャーナリズム学を専攻したいのですが、大学院へ進学するべきか、すごく悩みます。平井様が現地で活動されて、周りの方々のキャリア形成を見てきて、何かお感じになられたことがございましたらご共有頂きたいです。

## 平井氏

修士号が求められるポストは沢山あるかと思いますが、やはり重要なのは実体験です。どんなに良い大学院を出ても、勤務経験がなければまず国連では採用されません。最低の応募条件として、例えば、3年から5年の勤務、5年から8年の勤務と応募条件にあった場合、実際の勤務経験がないと採用されないと思います。そういった観点からすれば、やはり就職をして勤務経験を得ることが重要だと思います。大学院に行くのはそれからでも間に合うと思います。将来的にメディア、ジャーナリズムに入られていくのか、国連とかのPR、広報官とかを目指すのかで取り組みも変わってくると思うのですが、やっぱり勤務経験、職務経験を積

むというのは非常に大事だと思います。

#### 鈴木

今国連のインターン用にCVを書いて、藤井先生に添削をして頂いています。自分と向き合う良い機会になっていますが、紛争下でキャリアを形成する際には、どういうことをアピールすればいいのかお聞かせください。また、NGOと国連で求める人材は違うと思いますが、向いている人、求められている人についてお聞かせください。

#### 平井氏

まず、紛争地は生活環境が非常に厳しい。治安が悪いので、メンタルに強い人、生活環境が悪くても頑張れる人が第一条件ですね。それはどうやって見極めるのかって言うと、行ったことがない人を採用するのはリスクですね。なので、この人シエラレオネで働いていたから、アフガニスタンに送っても大丈夫かなとか、アフガニスタンで働いていたからイラクに行っても大丈夫かなというのを見るかと思います。特にNGOでは、そういった意味で、勤務経験が重要視されると思います。

NGOも国連も、基本的に求める要素は、実行力がある人や、異国で異文化の環境の中で、色々な国籍やバックグラウンドの人たちと働くことになるので、多様性を尊重できる人、チームで働くことができるか、そのような経験を持っていることが一般的に求められるポイントになるかと。もちろん、例えば日本のNGOというくくりでいくと、様々なことができることが求められます。事務所長の役割一つをとっても支援内容を決める能力が必要だし、人事をまとめることもできないといけないし、会計も見ないといけない。さらに治安に関する判断もですね。つまり、何でもできる人。ただ、より大きな国際NGOや、国連などになると、その役

によって必要なスキルが定まっています。もう少し業務が細分化されています。応募するポストに必要なスキルが個々に定められているので、応募条件をしっかりと読んで、それに沿うように履歴書を書き直すことや、自分の経験の中でそれに一番関連がある部分を抽出して履歴書でアピールするということが必要になると思います。

#### 藤井

平井さんは大学卒業後の就職先を辞め、どうして国際協力分野、NGOで働こうと思いましたが？

#### 平井氏

もともと、国際協力分野で仕事がしたかったのです。民間企業で数年間働いたのですが、民間企業で働いたのは大学院の資金を貯めるためでした。あと、一般社会に一旦出てみて、それでもなお国際協力の道に戻りたいって思ったら、本当にそれは自分がやりたいことだという確信が持てると思って、民間企業に一旦は就職しました。なので、民間企業を経てもともとやりたかった仕事に就いたのです。

後悔をしているわけではないのですが、国際協力で自分が現場に行って何かをする、というのは大変なやりがいにはなるのですが、学生さんたちに伝えているのは、易しいキャリアではないということです。生涯収入にしても、メンタルやフィジカルな負担にしても。また、現場に行き働くことだけが国際協力の形態ではなくて、直接国際協力分野で働く形ではない社会貢献もできます。例えば、民間企業で働いていても、途上国で事業展開していくことによって、そこで雇用を生み出したり、現地の人の能力強化に貢献したりしているわけなので。いろんなアプローチがあるので、学生さんにはいろんな選択肢を考えてもいいのでは、と



伝えるようにしています。

## 藤井

紛争下で生活されている時に、先ほどメンタルの話も出てきましたが、どのようにリラックスしたり、気持ちを切り替えたりしていらっしゃいましたか。

## 平井氏

失敗したなと思うのは、完全にバーンアウトをしてしまった経験があることです。地方に駐在だったのでどこかに行って何かをするとか、レストランに行くとか、娯楽が一切無いので、やっぱり仕事しかやることがないのです。田舎なので、気分転換と言ったらそこにいる外国人の何人かで集まってご飯を食べたり、パーティーをしたりする程度で。サリプル州というピースウィンズで駐在していたところは、外国人は私たち日本人3人しかいませんでした。ファリヤブ州にいたときは、軍隊じゃない国連やNGOの文民を頑張っとかき集めても、10人ちょっととか、狭い世界です。そういう中でコンパウンド、事務所がある同じ敷地内に住んでいるということもあります。外も治安上の理由で自由に歩けるわけではないので、やはり閉ざされた空間の中にずっといます。そうすると他にやることがないから仕事をしてしまう。そうしてバーンアウトしてしまったので、それは振り返っての反省です。上手くワークライフバランスを取っている人たちは運動とかヨガをやったり、読書をしたりしていました。他にやることがないからといって仕事をしてしまわない人たちが、上手にメンタルバランスを保てる人だと思いました。

## 菊地

先ほど、触れられた大学院のことについてお伺いさせてください。大学院も日本で進学する

のと、アメリカ、ヨーロッパで進学するのと、それぞれ強み等、違うと思います。平井様はアメリカの大学院に進学されましたが、どのようなきっかけとか理由があってその大学院を選ばれたのかを教えてください。

## 平井氏

アメリカで生活していたことがあったので、アメリカの大学制度と大学院制度に馴染みがあり、アメリカ留学を決めました。今振り返ってみれば、ヨーロッパの大学に行っても良かったのだと思いますが、ヨーロッパの大学を選択肢に入れなかったのは、視野が狭かったのでしょうか。自分のやりたい分野が決まった時点で、それに該当するところを探し出して、結局応募したのが4校か5校、その後受かったところからどれにしようかと検討して絞りました。

## 鈴木

私も大学院進学についてお伺いしたくて、お仕事と両立されながら勉強の準備をするのってすごく大変なんじゃないかと思います。なので、全然違うお仕事をしながら、国際協力への道を目指し続けたモチベーションというか、進学準備のためにどのようにお時間を作っていましたか。



## 平井氏

私は、仕事を辞めてから大学院留学のための勉強を始めました。翌年ぐらいに留学したいと

思っていたんですけど、仕事が忙しくて留学のための準備が全然進まない中で、何か仕事で思うことがあって、今のうちに辞めてしまおうと思って退職しました。大学院に行くための勉強を始めて、同時にインターンもして、東京のUNHCRやピースウィンズでインターンをしました。なので、やっぱり仕事をしながら大学院留学の準備をするというのは大変だとは思います。

#### 菊地

先ほどのお話の中で、国際協力に携わるのは国際機関だけではなく民間企業もあるとお話を頂いて、正直僕はまだ大学院に進学して国際協力に進みたいというのが明確には決まっていますが、やっぱり国際機関と民間企業を比べると、直接的な支援を行えるのは国際機関だとは思います。ですが、国際貢献をするために、民間企業の方がいい点、民間企業だからこそこできる点というのはありますか。

#### 平井氏

命が脅かされている人たちの命を助けるっていうのは、人道支援団体じゃないとできないと思います。ただ、その国や地域の、中長期的な発展では、国際協力が必ずしも効率的ではない。事業が終わって支援が終わったら活動が止まってしまうということは多くあります。民間企業の場合は、それなりの投資をして進出していくので、中長期にわたって影響が続いて、インパクトがあるのではと思います。直接雇用だけではなくて、その人たちの能力強化という形でインパクトがありますし、経済への貢献という意味では、民間企業は効率的なのかなって思います。規模も大きいかなと思います。

#### 鈴木

人道支援との関連で、アフガニスタンの

UNAMAの中で行われてきた統合的アプローチについて伺いさせてください。国連ミッションに人道支援の調整を担わせるというお話がご講演の際や民と軍との関連の中でありましたが<sup>2</sup>、この調整という活動は具体的にどのようなタスクを国連PKOが担うことになるのでしょうか。

#### 平井氏

UNAMAは政治ミッションです。本来であれば人道支援の調整を行うのはOCHA（国連人道問題調整事務所）なので、人道に関する調整は、国連の政治ミッションが行うべき役割ではないのです。ですが、最初はUNAMAが人道調整に関わっていて、最終的にはOCHAが事務所を設立して、UNAMAが携わるのは復興開発支援の調整、OCHAが人道支援の調整、と棲み分けを始めました。

ただ、実情として、私がいた州にいるアクターの数に限られていて、ドナーの人たちもいましたけど、OCHAは事務所を持っていなかった。そのため、ファリヤブ州で洪水が発生し、20世帯の人が家を失いましたってなった時に、ファリヤブで活動しているNGOと日々連絡をとっているのは私が所属していたUNAMAだったので、調整会議を開いて、じゃあ、A団体はテントを提供し、B団体はノンフードアイテムのキットを提供します、という形で調整をし、支援を届けることに関わってはいました。

ただ、本来であれば政治ミッションであるUNAMAがそういった人道の調整に携わることは、原則としてあまりなかったです。ただ政治ミッションだったということで、人道支援のコミュニティと、例えば、当時ファリヤブで活動していたISAF（国際治安支援部隊）との間を取り持つことは重要な役割の一つだったので、そのような調整は積極的にしていました。例えば、これから今週から来週にかけて、ここで軍

事オペレーションをするので、気をつけてできるだけそこには立ち入らない方がいいですよ、というような情報を現地で活動しているNGOと共有をする形での間接的な人道支援のサポートを行っていました。

また、統合的アプローチのポイントですが、アフガニスタンとイラクで統合的アプローチが一時ブームになりました。安定化という、治安がまだ安定しない環境の中で、いかに安定化させるのかという中で出てきたアプローチでしたが、イラクでもアフガニスタンでもあまりうまくいったとは言えなかったのではないのでしょうか。民軍と一緒にプロジェクトを実行するというのは、人道支援の原則と相容れない。人道支援ではない支援を仮に実施するとしても、民軍連携してやっていくことが最も効率的なのかっていうと、決してそうではないのかなと、アフガニスタンの経験から思います。というのは、そもそも物の見方やタイムラインが違うのです。軍隊はそんなに長期的な展開をしていなくて、部隊のローテーションは6ヶ月、時には4ヶ月しか現地にいません。だから、計画のスピードが全然違って、例えば学校を建設することになった場合に、軍は自分たちの部隊が駐留している間にオペレーションをして学校を建てて、そしたらみんながハッピーで何か協力をしてくれて治安が安定するような考え方が多いのですが、本来だったら学校を建設するには、教育省との調整、現場の確認、見積もり、調達のプロセスが入ってとなると、通常1年以上はかかるような事業なのです。性質として相容れない部分があるかと思います。

アフガニスタンで思ったのは、軍隊や警察の役割は、あくまで治安の維持、安全な環境を作ることにはフォーカスするべきで、安全が確保されれば、開発復興支援が可能な環境になるわけです。自分たちの得意分野に特化してくださいと思うのです。

藤井

私もまだまだ伺いたいことはありますが、そろそろお時間です。最後に、平井さんがアフガニスタンだからこそ長く滞在できた理由等ありましたら是非お聞かせください。

平井氏

お写真をお見せできれば良かったのですが、とにかくすごい所でなんです、環境が。すごく美しいところで、人もすごく素朴で、良い人たちです。自分が初めて経験する国際協力の現場だったこともあり、もう1年、あともう1年っていう感じで6年経ってしまったっていう感じです。さすがに後半は治安も悪化してきて、かつて自分が惚れ込んだアフガニスタンではなくなりつつあったということもあり、環境を変えたくなり一旦離れたのですが、また戻る機会があったら行きたいと思います。今は家族がいるので難しく、そんなに身軽には動けないのですが、いつかまた戻りたいと思っています。

藤井

改めてアフガニスタンの魅力は何ですか。

平井氏

やはり、その美しさですね。



藤井

アフガニスタンをめぐるのは、紛争の再発をはじめとするネガティブな報道に接する機会が



非常に多いので、平井さんの感じていらっしゃる美しいアフガニスタンについて、なかなか目を向けることはありませんでしたが、紛争地に勤務する際に、現地に向ける大事な眼差しだと

も感じました。美しいアフガニスタンの姿も、私達はもっと学んでいきたいですね。本日は貴重なお話を本当にありがとうございました。

---

1 藤井広重他（2020）「平和と公正な社会（SDG16）の実現を目指して 一野口元郎国際司法協力担当大使と宇都宮大学国際学部生による座談会―」『宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報』第12号、14－22頁；藤井広重他（2021）「SDGsの達成に向けた国際機関の活動とキャリア形成の視点―国際機関の職員（境悠一郎氏、田邊宙大氏）と宇大生による座談会―」『宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報』第13号、72－82頁。

---

2 内閣府国際平和協力本部事務局（2015）『第6回国際平和協力シンポジウム報告書』（[https://www.cao.go.jp/pko/pko\\_j/organization/researcher/pdf/sympo6\\_report.pdf](https://www.cao.go.jp/pko/pko_j/organization/researcher/pdf/sympo6_report.pdf), アクセス2022年1月3日）。